

## 第1回日本SPF豚研究会の概要

清水港飼料(株) 海老成直

第1回日本SPF豚研究会が、平成4年3月6日午後1時より東京都千代田区飯田橋会館にて、参加予定者をはるかに上回る100余名が参加して、盛大に開催された。

開会にあたり柏崎会長（農林水産省家畜衛生試験場研究第1部長：現企画連絡室長）よりSPF豚の集団変換を推進していくための本研究会の重要性に対する養豚関係者の支援を要望する挨拶のあと、講演とパネルディスカッションに入った。

まず伊藤忠飼料防疫センターの大脇正治氏から「SPF豚農場における衛生検査成績」（座長は静岡県中小家畜試験場の曾根勝氏）と続いて日清製粉検査センターの日高秀造氏が「コンベンショナル豚農場における疾病の発生動向」（座長は(株)シムコの赤池洋二氏）について発表された。この両講演内容は本誌に掲載されているため省略する。

このあとSPF豚事業所の紹介があり（座長は千葉県畜産センター養豚試験場の宮原強氏）、まず、ホクレン滝川スワインステーションの岩瀬俊雄氏より昨年3月に完成した同農場（滝川市東滝川）のSPF原種豚の生産設備について披露された。LW.D生産を目的として、今年夏以降より本格的に開始する計画に沿い、滝川畜産試験場とシムコの技術協力を得て推進している系統維持群（GGP豚）、増殖群（GP豚）、性能調査群の現況と生産技術上の問題、ETの展開（今年2月より実施）について説明があった。今後の課題は、生産された種豚の導入先とその展開にあることを提

起した。

また、全農東日本原種豚場矢板種豚駐在所の坂口一平氏が全農東日本原種豚場（岩手県雫石）の概要と矢板種豚駐在所での帝王切開によるプライマリーSPF豚の作出、人工哺育に至るまでのシステムと原種豚場における飼養管理技術などを紹介した。

その生産システムは、東日本原種豚場からSPF原種豚をSPF県連、農協F1生産種豚場に供給し、ここで作出されたF1雌と雄豚が、肉豚生産農家に供給普及するものである。

本稼働は平成7年の予定であるが、平均500頭単位のF1生産農場を全国の11県、11カ所以上に展開する計画も推進されようとしている。

最後に「SPF豚の普及と問題」と題したパネルディスカッションが行われ（司会は著者）、千葉県畜産センター養豚試験場の内藤昌男氏、静岡県中小家畜試験場の曾根勝氏、茨城県養豚試験場の新井忠夫氏、全農畜産生産部の吉田修作氏、ホクレン滝川スワインステーションの岩瀬俊雄氏、住商飼料畜産(株)の花岡秀昌氏、シムコの高橋吉男氏、ノーサンエびのファーム(株)の森川力氏の各氏がパネラーとして参加し、それぞれの現場からの問題点を指摘した。

内藤氏は、千葉県のSPF検定と農場の認定の現状から、畜産目的のSPF検定基準を実験動物のSPF検定とは別に作成し、対象農場（GGP、GP、コマーシャル農場）の範囲について問題を

## 第1回日本SPF豚研究会の概要

提起した。

曾根氏は、SPF豚の条件にアクチノバチラス病、パスツレラ（D型）病もフリーであることと、これら呼吸器系疾病のワクチンの実用化を要望し、SPF豚検定は臨床所見、発育成績、農場飼料要求率、と畜検査成績など総合的判定で行うことが望ましく、SPF化の推進は地域全体ですすめる必要があると指摘した。

新井氏は、ADの清浄化対策と立地条件からSPF農場の設置と作出したSPF種豚の導入先の欠如を指摘し、また供給した種豚のSPF化を維持管理するノウハウが必要であり、農場周辺の清浄化維持が大きな問題であることを強調した。

吉田氏は、全農の系統造成計画にもとづく西日本、東日本両原種豚場を種豚供給基地とした種豚生産、供給体制の基本方針を説明し、とくにSPF豚の生産から処理加工、販売までの一貫体制が全農SPF豚の商品としての特徴であることを強調した。SPF豚は、生産段階に止まらず清浄ラインで処理販売し、付加価値を一層高める体制作りが必要であり、そのためにもまずSPF認定制度と検定の必要性を提唱した。

岩瀬氏は、種豚供給、普及については未経験であると断った上で、SPF豚の定義、SPF状態の維持、判定方法の統一などの課題を解決することに懸念を示した。

花岡氏は、原種豚農場の定期検定方法の実情と問題点を説明し、特にSPF商業農場の自家検定については、原種豚農場の検定方法とは別に農場飼料要求率、繁殖成績、農場の環境衛生等を基準にして判定すべきであり、定期的な農場検査結果を維持管理に活用することを提案した。

高橋氏は、畜産目的のSPF豚に対する認識を

再認識する必要がある、商業農場における検定は、経済的観点から判定する方向を支持した。また、SPF豚を普及する上で、種豚価格、清浄環境の維持管理、種豚輸送時の防疫、と場での衛生対策が問題となっていることを指摘した。

森川氏は、種豚を生産、供給していく上で、健康な種豚を生産、維持する体制がもっとも重要であり、種豚の能力向上のための血液更新などの条件を基にした原種豚農場における検定方法の実状から問題点と改善点を提起し、SPF豚の展開に当ってはコンベンショナル農場のSPF化が最大の課題であることを提唱した。

今回のパネルディスカッションに際して、時間の制約から普及上の問題点を具体的に討議、整理することができなかったことは、今後の反省事項であり、とくにSPF豚の集団変換上、個体レベルでなく、農場の検定がきわめて重要な点であることに焦点が絞れなかったことは遺憾であった。

しかし、パネルディスカッションの結びに当たって赤池日本SPF豚協会会長は、SPF豚の普及と問題点、検定制に関し、次のように総括した。

すなわち、SPF豚の産業目的は、生産性向上と消費者志向との合致にあるとし、これらを実現するためには、種豚生産供給農場における疾病に比重をおいた検定制と商業農場では、生産性と肉の安全性に比重をおいた認定制が必要である。したがって、早急にわが国におけるSPF豚農場の認定基準を制定する必要があるため、正式に研究会に諮問する予定（平成4年4月9日付で実施した）であり、秋の第2回研究会までに答申を得たい考えを明らかにした。

講演終了後、懇親会が行われ盛況裡のうちに閉会した。